
病みつき六課

勳b

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病みつき六課

【Nコード】

N 6 9 1 2 W

【作者名】

勲b

【あらすじ】

病みつきシリーズまさかの連載！！？

これは、彼を巡る物語――

自分の行動を邪魔されて、他人の行動を邪魔する――

これは、そんな物語

『人間を愛することは必然だ』

ブログな1日（早朝）（前書き）

病みつきシリーズ連載！！

ブログ書き直すかも

ブローグな1日（早朝）

俺の朝は早い

隊長補佐というポジションにいる俺はその名が示す道理隊長の補佐が仕事だ

この場合隊長というのは六課にいる隊長全てだ

——そんな俺の朝は早い

「遅いぞ!!」

まだFWの朝練が始まるより1時間ほど早い

そんな時間に俺は何をやるかと言うと、目の前にいるジャージ姿のシグナムさんと共にランニングだ

「すいません、シグナムさん」

俺はシグナムさんに頭を下げる

「次からは遅れないようにしろ」

「お前が遅れれば、それだけ私とお前が一緒に居る時間が減るの

だからな」

「私はお前と少しでも長く一緒に居たいんだ」

「——誰よりもな」

シグナムさんは虚ろな瞳で俺に言う

「……すみませんでした」

シグナムさんと話していると後ろから声を掛けられる

「隊長補佐、シグナム副隊長おはようございます」

「おはようございます」

ティアナとスバルの2人が俺とシグナムさんに挨拶をする

「おはよう、2人共どうしたの？朝練にはまだ時間があるけど…」

…」

シグナムさんは黙って2人を見ているため、俺が2人に聞く

「隊長補佐が毎朝走ってるって話を聞いたので、私達も着いていこうかなーって思ったんです」

スバルが元気よく応える

2人の服装はジャージなのはそっという意味か……

シグナムさんが2人の前に立つ

「お前達には朝練があるのだからランニングなど止めて、高町との朝練に備えたらどうだ？」

「ランニング後の朝練何て集中して出来ないだろうしな」

「朝練もランニングも両立出来るように頑張りすよ」

「それに、朝練前の軽い運動と思えばこれぐらい大丈夫ですしね」

シグナムさんの忠告をティアナが反論する

「なあ、ティアナ」

俺が呼ぶとティアナが目線を此方に向ける

——ティアナもシグナムさん同様虚ろな瞳で俺を見る

「どうしたんですか、隊長補佐」

「そういえば、隊長補佐は私達のランニングの参加に賛成ですよね」

「隊長補佐が私のことを拒否するなんて——」

「隊長補佐は私と一緒に走ってくださいすよね」

「大丈夫です、スバル程では無いですけど、六課に来てから体力には自信があります」

「隊長補佐の足を引っ張るようなことはしません」

ティアナが黙ると畳み掛けるようにスバルは言う

「そうですよ、隊長補佐」

「いきなり朝練やるよりも、隊長補佐と一緒にランニングしたあ

とのほうが私はいいです」

「隊長補佐は、私を入らないなんて言いませんよね——」
そう言つとスバルも黙つて俺の目を見る

——スバルも虚ろな瞳だ

俺はシグナムさんの方を向く

「とりあえず、今日ぐらい、一緒に走らせても駄目ですか？」

「駄目だ」

シグナムさんは即答する

「さつきも言つたが、私はお前と少しでも長く一緒に居たいんだ」

シグナムさんが理由を聞くとティアナが言つ

「それってただ、自分の立場を利用して隊長補佐を無理矢理自分の傍に居させてるだけじゃないですか」

「隊長補佐がどんなに嫌がつても、立場上隊長補佐はシグナムさんの言つたことを聞くしかない」

「どんなに嫌でも、傍に居るしかない」

「それって、隊長補佐が可哀想だと思わないんですか？」

ティアナはシグナムさんを軽く睨みながら言つ

「そんなことあるはずがないだろ」

「こいつは進んで私と毎朝ランニングしているんだからな」

「それに、こいつが私を嫌いなんて——」

シグナムさんもティアナを睨み返す

「今日の昼は、時間が空いてますから、その時間に埋め合わせしますから」

そう言うと、シグナムさんは考える

といつても、直ぐに返事をする

「いいだろう、今日はお前に免じて特別にだ」

「「ありがとうございます」「」

2人は息をそろえて返事をする

「それじゃ、行こっか」

俺はそういつて軽く走りだす

——これが、俺の朝だ

ブログな1日（早朝）（後書き）

こんにちはー戮bでーす

病みつきシリーズ連載！！

というわけで、今回はまだブログその1です

皆さんどうでしたでしょうか

キャラの口調が変だと思った場合、報告してくれたら嬉しいです
！！

PS感想書いてくれたり、お気に入り登録してくれたら嬉しいです
す！！

他の連載、短編の病みつきシリーズもよろしくお願いします！！

プロローグな1日(朝) (前書き)

PV7300

総合評価250

お気に入り登録70

それぞれ達成記念と言う名のプロローグその2です

「があるのに最後に」がないのは仕様です

「が書かれるまでそのキャラのセリフが続くということになります

見にくかったり、前の方が言い方は教えてください

ブローグな1日（朝）

ランニングから帰ってきたあと

俺はシャワーを浴びて、制服に着替えると今日の仕事を確認するため、自室に向かった

俺の部屋の前には彼女——フェイトさんが居た

俺の部屋の前から動かずずっと扉を見ている

俺はフェイトさんに近づき声を掛ける

「何か用ですか？フェイトさん」

フェイトさんは俺に気付くと、近づいてくる

「おはよう、今日はランニングの時間早かったんだね」

「はい、この間から急に早くなって……」

俺が応えるとフェイトさんは悔しそうな表情をする

「そっか……」

「あなたも迷惑だよな」

「朝から無理矢理走らされるなんて」

「いくら隊長格の人はあなたに何でも我が儘言える権利があるって言っても」

「それを朝練前の走りに付き合えなんて――」

フェイトさんは虚ろな瞳で俺の目を見る

――嬉しそうに笑いながら

――俺を見る

「い……いえ、迷惑じゃないですよ

「シグナムさんも普段事務関係の仕事しかない俺を気遣って誘ってくれたんでしょうから」

俺は苦笑いを浮かべながらフェイトさんに言う

「……そっか

「君は優しいし、嫌だなんて我が儘言えないよね」

――でも

と、彼女は続ける

変わらず、俺の目を見ながら

――俺に顔を近付けながら

「私には何を言っても良いんだよ

「あなたの我が儘を何でも聞いてあげる

「だって、私は――」

「2人共何やってるんですか？」

フェイトさんと俺の鼻先が触れ合いそうになるぐらいに近くなつた時

彼女——キャラちゃんに後ろから声を掛けられる

「おはよう、キャラちゃん」

俺は彼女の方を向き、挨拶をする

「おはようございます、お兄ちゃん、フェイトさん」

キャラちゃんが言ったお兄ちゃんとは俺の事だ

……好きに呼んでいいと言ったらこうなった

「……おはよう、キャラ」

フェイトさんは不満そうに彼女に挨拶をする

「フェイトさんはお兄ちゃんに何をしようとしたんですか？」

「お兄ちゃんが嫌がる事したら駄目なんですよ

「お兄ちゃんは私の——」「私だけの——」

キャラはそう言つと俺の横に立ち、俺の手を取る

——虚ろな瞳で俺を見ながら

——キャラは嬉しそうに笑う

それを見てフェイトさんは軽くキャラを睨む

「別に彼が嫌がる事なんてしてなかったよ

「彼も私も嫌な事じゃなかったよ

「むしろ、私達の邪魔をしてきたキャラの方が彼は嫌がってるんじゃないかな？」

フェイトさんの言葉を聞くと、キャラちゃんはフェイトさんを睨み返す

「そんなことないですよ

「お兄ちゃんはきつと嫌がってました

「お兄ちゃんは誰にでも優しいから何も言わなかっただけです

「そんなお兄ちゃんに無理矢理キスしようなんて――

「お兄ちゃんが可哀想だと思わないんですか」

キャラちゃんの言葉にフェイトさんは更に強く睨む

「えーと、キャラちゃんは朝練はいいの？そろそろ始まる時間だけど」

俺が2人の間に立ち、キャラちゃんに聞く

「今日のお兄ちゃんの朝はなのはさんと一緒にFWの朝練を見ることに変わったことを伝えに来たんです」

「私もそれを伝えに来たの」

キャラちゃんは俺の質問に応えるとフェイトさんも応える

「わかった、それじゃ行こっか」

俺が言うとキャラちゃんは俺を引っ張るように来た道に戻る

「フェイトさんも、また後で」

俺が後ろを向き、フェイトさんに言う

すると、さっきまでキャラちゃんを睨んでいた表情とは一転して嬉しそうに笑う

「……お兄ちゃん」

キャラちゃんは俺を見る

フェイトさんに向けた表情よりもまだが、俺を睨みながら

「キャラちゃんもありがとう、わざわざ伝えに来てくれて」

俺はキャラちゃんの頭を撫でながら言う

すると、彼女も満足そうな笑みを浮かべ、頬を紅くする

「お兄ちゃんのためなんだから、別にいいよ

「お兄ちゃんが私を誉めてくれるなら——

「お兄ちゃんが私の傍に居てくれるなら——

「お兄ちゃんが喜ぶなら——

「私は、何だってやるよ

「——お兄ちゃん」

キャラちゃんは俺の目を見ながら俺に言う

——変わらない瞳で俺を見ながら

俺の1日は始まったばかりだ

ブログな1日（朝）（後書き）

こんにちはー戮bでーす

病みつき六課は他のよりも書きやすいです

……台詞だけだからかな

ブログその1で既に沢山の方に評価してもらい嬉しいかぎりですー！！

ブログその1を投稿した後に、メッセージで各キャラのヤンデレになった理由を書いて欲しいとあったのでとりあえずブログが終わったら、好評価を記念してヤンデレになった理由を書くかも……

作者の気まぐれで変わりますけどね

書くとしても、書かないとしても、活動報告にてお知らせします
感想くれたら嬉しいですー！！

PS 活動報告にてフェイトの病みつきセイバー（仮）を書きましたので知ってる方は、見てくださると嬉しいですよ

病みつきシリーズのリクエストは何時でもウェルカムです

なのは以外でも知ってれば考えますし、知らなければ、調べた後で考えます

活動報告にてツンデレ+ヤンデレのセリフを書いています……

自信が無いのでコメントくれたら嬉しいです

ブログな1日(訓練)(前書き)

総合評価400達成!!

お気に入り登録130達成!!

PV19000達成!!

今回も短めです

プロローグな1日（訓練）

キャロに引つ張られるがまま俺が着いたのは六課の訓練場だ

今はFW達の訓練を少し離れた場所でヴィータと見ている

「ヴィータは訓練に参加しないでいいの？」

俺の隣に立っているヴィータに話し掛ける

「まあ、なのは1人で充分だろうしな」

今俺達がやっているのは動きのチェックだ

「それに、お前の隣にいたいしな

「朝会おうとしてもシグナムに邪魔されるし

「昼は隊長格の奴らが

「夜はなのはとフェイトが邪魔するしな

「たく、揃いも揃ってあたしの——」

「ヴィータちゃんの何なのかな？」

ヴィータがいい終わるより先になのはさんが此方に近づきながら
言う

「……FW達の訓練はいいのかよ」

「自主訓練させてるから大丈夫だよ」

軽く睨みながらヴィータが言い、ニコニコとした笑顔でなのはさん
んは応える

「それよりも早く教えてよ

「彼はヴィータちゃんの何なのかな？

「何——なのかな？」

——なのはさん言う　そ——の目は笑ってなく

——静かにヴィータさんを睨みながら

「こいつはあたしの大事な人だ

「——あたしだけの

「——大事な」

ヴィータは俺の手を軽く握りながら言う

「そんなこと言わないでよ　「彼だって困っちゃうよ

「彼は私の大切な人なんだから

「ヴィータちゃんでも彼を困らせるようなことしたら——

「——許さないよ」

なのはさんは俺の手を取りながら言う

「何でこいつがなのはの大切な人になってるんだよ

「我が儘言ってるのは自分だろ

「こいつはなのはのこと嫌いかも知れないんだぞ

「それに——

「こいつが好きなのはあたしだ」

ヴィータは俺の手を握る力を強くし、なのはさんを更に強く睨む

「止めなよ、ヴィータちゃん

「彼が好きなのはヴィータちゃんじゃないよ

「彼は誰に対しても優しいから、ヴィータちゃんは誤解してるだけ

「だって――

「彼が好きなのは――」

なのはさんも負けずと俺の手を強く握り、ヴィータを睨み返す

「勘違いしてるのはなのじゃないのか？

「こいつは優しいから――

「あたし以外の奴に優しくする意味なんか無いのに

「なのはみたいに勘違いする奴が増えるだけだってのに」

「彼が優しくするべきなのは私だよ

「彼は私だけ見てればいい」「彼は私の傍に居るだけでいい

「彼は私のことだけ大切にすればいい

「彼は――

「――私の」

――お互いに口を閉じる

――互いに互いを睨みながら

そんな2人は声を掛けられる

「何やってるんですか？」

声を掛けてきた彼女——ティアナは首を傾げながら言う

「……自主訓練は終わったのかな、ティアナ」

なのはさんはティアナの方を向くと言う

「はい、一通り終わりました」

「それよりもなのはさん、隊長補佐の手を離してくれませんか
隊長補佐に触れていいのは私だけなんですから」

ティアナなのはさんを睨みながら言う

「何でお前だけがこいつに触れていいんだよ」

「こいつはお前達じゃなくて私の——」

「2人共駄目だよ」

「彼は私の大切な人なんだから」

「私だけの——」

「違いますよ」

「隊長補佐は私の傍に居てくれる人です」

「ずっと私だけの——」

なのはさんとヴィータが俺の手を離すと、睨みつける

——自分以外の人を

——虚ろな瞳で

——睨み付ける

「ねえ、2人とも、私とお話しようか」

そう言って歩きだすのはさん

2人はなのはさんの後を追うように歩きだす

そんな3人の背中を見ながら

俺はため息をつく

——今日の朝は、これで終わりだ

ブローグな1日（訓練）（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

ヴィータの口調これであつてるかな……

違和感があつたかたは教えてくれたら嬉しいです

さて、前回の後書きに書いたヤンデレになる切っ掛けは

1なのは

2フエイト

3キャラ

4ティアナ

のどれかになります

それぞれのキャラ目線となります

どれが見たいか応えてくれたら嬉しいです!!

P S 病みつぎ六課は文字数少ないのがデフォになるかも……

ブログな1日(昼)(前書き)

総合評価560

文章、ストーリー評価100

お気に入り登録170

PV33000

ユニーク9000

達成記念!!

ブログその4です

……関西弁難しかった

後書きの方にちょっとした報告がございますので、よかったら見てください

ブローグな1日（昼）

FW達の朝練が終わり、昼飯を食べていると、彼女が俺に話し掛ける

「今日の昼は何か予定ある？」

彼女——はやてさんは俺に聞いてくる

「すいません、今日の昼はちょっと……」

俺が言うと、はやてさんは俺を軽く睨んでくる

「ふーん、私の用事より大事な用事があるんか

「私は君の事が最優先なのに、君は違うんや

「私が君のことを大事にしても、君は私のことを大事にしてくれないんか」

はやてさんは続ける

「悲しいなあ

「君が私を大事にしてくれないなんて

「やっぱり君は——」

「どうかしましたか、我が主」

はやてさんが最後まで言うより先にシグナムさんが話し掛けてくる

「私の彼が我が主に迷惑でもかけましたか？」

「……なあ、シグナム」

はやてさんは目線を俺からシグナムさんに移す

「何時から彼はシグナムのものになったん？」

「彼は何時だって私のものはずやけど」

「そんなことないですよ、我が主」

「彼は何時だって私のものです」

「何時も私のものです」

シグナムさんははやてさんに言う

——互いに変わらない

——虚ろな瞳で

「……なあ、シグナム

「彼は私の事を何時も考えてくれる

「私だけの事を考えていてくれる

「そんな彼がシグナムのものなん？

「どう考えても、私のものと思わん？」

「思いません

「彼が考えてるのは私の事です

「我が主ではなく、私の事を何時も考えてくれる

「彼は私のものですから」

互いにそう言つと、互いに軽く睨み合う

「……まあ、彼を困らせたくないし、今回は大人しく下がることに
しよか」

そう言つと、はやてさんは俺に近づいてくる

「シグナムに迷惑掛けたらあかんよ」

それだけ言っと、はやてさんは来た道に戻る

「それでは、私達も行くでしょう」

俺は立ち上がると彼女に聞く

「昼の仕事は何ですか？」

「私と模擬戦だ」

……え？

「お前と模擬戦をやれる機会は滅多に無いからな

「それに、模擬戦だったら、高町やテストロッサにも邪魔されないし

「何よりも、お前のことを最も近くで感じることができるしな」

それだけ言っと、彼女は歩きだす

そんな彼女に俺は着いていく

——最悪の昼になりそうだ

そんな予感を胸にしながら

「そんなことがあったの」

目の前の彼女——シャルさんは俺の手当てをしながら言う

「君は戦闘するタイプの人じゃないのに、無茶して戦うから」

……今の俺はボロボロだ

「やっぱり君もお姉さんと一緒に医者をやったほうがよかったんじゃない？」

……よかったかも

「今からでも遅くないよ

「はやてちゃんにお願いして私と2人で六課の医者をやる」

「いや、遠慮します」

俺が断るとシャルマルさんの手が止まる

「なんで断るの？」

「お姉さんと一緒に居ようよ

「私と一緒に居るの嫌？」

「私よりシグナムの方がいいの？」

「愚問だな」

シャルマルさんの問いかけに彼女が応える

「……あら、シグナムお仕事はどうしたの」

「こいつが心配になってな、一区切りついたから様子を見に来たんだ」

それだけ言うと、座っている俺の手を引っ張り無理矢理立たせる

「彼は怪我人なんだからもう少し丁寧に扱ったかどうかしら
「シグナムはそんなに彼のことが嫌いなのか？」

「私がこいつを嫌うはずがないだろ」

シグナムさんは俺の手を引っ張り部屋から出る

「まだまだ仕事は残ってるんだ

「お前は私の傍にいていい

「仕事が終わるまで私の横にいろ」

俺の目を見ずに要件だけ言うシグナムさん

「——わかりました」

俺はそんな彼女に返事をする

——もうすぐ1日が終わる

プロローグな1日（昼）（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

プロローグは次回で終わります

プロローグが終わった後の話なんです

……リクエストが欲しいです

言い訳をしたら、私の方もネタはあるのですが、少ない

何よりも少ない

というわけで、リクエストなどくれたら嬉しい

。。。が主人公と。。。をする話

みたいな感じでしたら嬉しいです

キャラは4人までにしてくれたらなお嬉しいです

……さつきから嬉しいですばかり言ってる気がする

PSめだかボックス連載予告投稿しました

めだかボックスを知っている方は見てくれたら嬉しいです!!

病みつきシリーズ最新話も投稿しました

ブローグな1日（夜）（前書き）

今回は今までに比べるとヤンデレ要素少なめな気がします

……ヤンデレ要素メインなのに

今回は『！』等を半角から全角にしました

読みにくいと思ったり、このままでいいと思ったりしたらコメント
くれたら嬉しいです！！

ブローグな1日（夜）

仕事が終わったため部屋に帰ろうとした俺に彼女は声を掛ける。

「お仕事お疲れ様」

彼女——高町なのはは笑顔で言う。

「なのはさんもお疲れ様でした」

俺が言うと彼女は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「……今日ですか？」

恐る恐る俺が聞くとなのはさんは首を縦に振る

「ほら、早く行こうよ、フェイトちゃんとヴィヴィオが待ってるから」

そう言うとなのはさんは俺の手を取り歩きだす。

……今日も、か

俺はばれないようにため息をつきながらなのはさんに着いていった

「お兄ちゃーん!!」

なのはさんの部屋に入ってすぐにヴィヴィオちゃんが俺に抱きついてくる。

「こんばんは、ヴィヴィオちゃん」

俺の右足に抱きついていて彼女の頭を撫でながら言つと、もう1人の彼女も此方に来る。

「今日も来てくれたんだ」

嬉しそうな笑みを浮かべながら彼女——フェイトさんは言う。

俺は最近なのはさんの部屋に誘われるようになった。

俺としては構わないのだが、女3人に男1人というのは気まずい。

「はい、お邪魔でしたか？」

「全然邪魔なんかじゃないよ」

「むしろ、あなたに会えて私は嬉しいよ」

「ヴィヴィオも!!」

「私も嬉しいよ」

フェイトさんの言葉にヴィヴィオとなのはさんという順で続く。

「紅茶淹れてくるね」

そういつとフェイトさんはキッチンに向かう。

「私達も行こっか」

なのはさんは俺の手を掴んだまま歩きだす。

ヴィヴィオはなのはさんが掴んでない方の手を取る。

……今日はまだまだ疲れそうだ

そんな事を考えながら彼女達に着いていった。

俺は今ソファーに腰掛けている。

右側にはなのはさんが肩と肩が触れ合いそうになるぐらい近くに座っていて、ヴィヴィオは俺の膝の上に座っている。

「ねえ、ヴィヴィオ

「彼の膝の上から退いてあげなよ

「彼だつて迷惑だと思つてるよ」

なのはさんがヴィヴィオに言う。

「そんなことないよ

「お兄ちゃんは私のこと大好きだもん

「だから、お兄ちゃんはヴィヴィオのこと迷惑だなんて思つてない
「私のことだーい好きなお兄ちゃんはそんなこと考えたりしない」

ヴィヴィオは顔を上げ。俺を見ながら言う。

——俺の目を真つ直ぐ見ながら

そんなヴィヴィオなのはさんは言い返す。

「いーいヴィヴィオ

「彼が好きなのは私なんだもん

「彼はヴィヴィオのこと好きなのもしいけどそれは子供としてなんだよ」「だから、我が儘ばかり言つたら駄目だよ」

「何を言つてるかな、なのは」

なのはさんに言い返したのはヴィヴィオちゃんではない。

「何って、彼は私のこと好きって言ってるんだよフェイトちゃん」

俺達の後ろからトレイを持っているフェイトさんが言う。

「彼が好きなのは本当になのはなのかな？」

「私は違うと思うな」

そういつとフェイトさんはテーブルの上にカップを置くと俺の隣に座る。

なのはさんと変わらないくらい近くに座るとなのはさんは言う。

「だったら、フェイトちゃんは彼が一番好きな人は誰かわかるの？」

フェイトさんを軽く睨みながらなのはさんは言う。

「……なのはじゃないよ」

そんななのはさんに睨み返しながらフェイトさんは言う。

「だって彼が好きな人は私だもん

「彼は私のものなんだよ 「だから、私は彼のことは何でもわかるの

「——なのはと違ってね」

「お兄ちゃんが大好きなのはヴィヴィオだよ

「お兄ちゃんは何時もヴィヴィオのこと思ってくれてるもん

「ヴィヴィオもお兄ちゃんのこと何時も思ってるよ 「——大好きなお兄ちゃんのこと」

「彼が好きなのは私だよ 「フェイトちゃんやヴィヴィオじゃない
ない

「彼のことを一番考えてるのも私だし

「彼が何時も考えてるのは私のこと

「だって、私は彼の大切な人たもん

「——誰にも渡さない 「——誰にも渡したくない」

3人がそう言つと、それぞれの相手を睨む。

——光が無い虚ろな瞳で

——はつきりと睨む

俺はそんな気まずい空気の中紅茶を飲む。

——今日ももう終わりか

そんなことを思いながら。

——これが俺の『当たり前の1日』

——彼女達が『病みつき』になった俺の1日

——そんな1日も、これで終わりだ。

プロローグな1日（夜）（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

今回は本来ならまだ続く予定でしたがプロローグで書くネタではないと思ったためここまでです

……ヤンデレ要素少ない気がする

さて、前回の後書きにリクエストを書いたのですが、それに応えてくれた方に聞きたいことがあります

そのリクエストを書いて投稿するときに名前を出してよろしいでしょうか？

私が書くまでにコメントをもらえなかった場合はメッセージを送り、それでも無かった場合は名前は出さないようにします

応えてくれたら嬉しいです！！

リクエストの方も募集中ですので、気軽にコメント下さい！！

シチュエーションだけでも有り難いです！！

P S 活動報告にて

『病みつきなのは裏話』（仮）』

『病みつきキャラ（仮）』
を書きました

連載として

『めだかボックス』何でも知ってた少年』

を投稿しました

どれも興味がある方は見てくれたら幸いです！！

病みつきキャラにはちょっとした質問もありますので応えてくれたら嬉しいです！！

私が彼に病みつきになった理由なのは編（前書き）

プロローグ終わって早々の番外編その1!!

PV70000達成!!

総合評価660達成!!

お気に入り登録200達成記念!!

評価やお気に入り登録してくれた皆様には本当に感謝です!!

私が彼に病みつきになった理由なのは編

私の中の彼は特別な存在だ。

誰よりも愛しくて

何よりも大切に

何時までも傍にいたい

そう思うぐらい私は彼が大好きだ。

私が彼のことを好きになった理由は単純な出来事だった。

——単純な出来事だ。

機動六課設立前にフェイトちゃんから紹介してもらったのが彼だ。

フェイトちゃんが機動六課に誘ったらしい。

もちろん、この時の私は彼のことを好きになるなんて思ってもいなかった。

彼のポジションは隊長補佐という変わったものだ。

フェイトちゃんとはやてちゃんが考えたと言っていた。

そんな彼の仕事は隊長や副隊長のサポートだ。

もちろん隊長の中には私も入っていて――

「ごめんね、手伝って貰っちゃって」

「別に良いですよ、俺は隊長のサポートが仕事ですから」

彼は笑みを浮かべながら言う。

彼には事務の仕事を手伝ってもらっている。

彼に仕事を手伝ってもらうのはこれが初めてだ。

自分の仕事を彼にやらせているようで余りいい気分じゃないけど……

その時の私は彼とは余り話したことがなかった。

彼はよくフェイトちゃんやはやてちゃんと一緒に居ることが多かったからだ。

お互いに黙って仕事をする。

気まずい空気の中何時間が経つと彼は私に言う。

「後は、俺１人で出来るので高町隊長は休んでください」

私が何か言うよりも先に彼は続ける。

「今日だって朝からFW達の訓練だったんでしょしね、何時も働いている高町隊長にはゆっくり休んで貰いたいですから」

笑みを浮かべながら彼は言つと私を見ずに仕事を続ける。

「でも――」

「俺のことなら大丈夫ですよ、これが俺の仕事ですから」

彼は私に優しく言う。

「じゃあ、君の言うとおり後は任せようかな」

「はい、任せました」

彼の気遣いを無駄にしなくなかったし、その日は疲れてたから私は彼に残りの仕事を任せた。

「それと、私のことはなのはで良いよ」

「わかりましたなのは隊長」

彼は私の顔を一瞬見ると返事をする。

——今思えばその時から私は彼が好きだったのかもしれない。

優しい彼のことが好きだったのかもしれない。

少なくともその時の私は彼のことを『優しい人』とは思っていた。

私のことを気遣ってくれた優しい人だと。

そして、この思いに気付いたのはヴィヴィオと出会って数日後だ。

その頃には彼のまわりにはティアナやスバルがいて、たまにキヤロやエリオが居るぐらいだった。

彼はヴィヴィオが六課に馴染むまではとヴィヴィオの傍にいた。

ヴィヴィオが私とフェイトちゃん以外に懐いたのが彼だったからだ。

私がヴィヴィオと遊ぶ時も大抵彼が居た。

優しい笑みを浮かべながら彼はヴィヴィオの傍にいた。

私に向けた優しい笑みを他人に向けていた。

—— 凄く嫌だった。

胸が苦しくなるとかじゃなくて不快感しかなかった。

—— 彼が私以外の人と話すのを見る。

関係ない

—— 彼が私以外の人を見る。

関係ないはずなのに

—— 彼が私以外の人と仲良くしているのを見る。

関係ないなんて嫌だ

私は彼の傍にいたい。

優しい彼の傍にいたい。

優しい彼ならきつと何時でも私を見てくれる。

優しい彼ならきつといい子じゃなくても私を見てくれる。

優しい彼ならきつと——

何時からか私は彼を部屋に誘うようになった。

ルームメートのフェイトちゃんやヴィヴィオも喜んで彼を歓迎し

てくれた。

日に日に彼のことが更に好きになる。

彼の傍にいらなくても彼の事を考えるだけで更に好きになる。

——優しい彼は私以外にも優しい

——嫌だ

——彼に優しくされていいのは私だけ

私だけがいい！！

こんな我が儘も彼なら聞いてくれるはず。

優しい彼なら聞いてくれるはず。

——でも

私は言わない。

彼が困ることはしたくないから。

そう思っても、最近私の恋路を邪魔する人達が多い。

彼は誰にでも優しいからしょうがない。

誰にでも優しい彼

私にも優しい彼

私以外にも優しい彼

好きだよ

——どんな君でも大好きだよ

——どんな君でも愛してるよ

——でも

邪魔な人達はいらない。

私と彼だけ居ればいい。

彼の傍には私しかいない！！

私以外は必要ない！！

——だから

私は今日も彼を誘う。

今はまだ2人つきりにはなれないけど——

——私は彼と部屋へと向かう。

——邪魔な人なんか

——消えればいいのに

私が彼に病みつきになった理由なのは編（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

知ってるか？

原作なら皆仲が良いんだぜ。

……どうしてこうなった！？

まあ、今更ですな。

今回もヤンデレかどうかと言われたら微妙な感じですね。

番外編ですし良いよね？

PS 活動報告にて

病みつきマテリアル

病みつきアリサ（仮）

病みつきvividその1

病みつきステラ（仮）（ガンダム）

病みつき真耶（仮）（IS）

病みつきアインハルト（仮）

病みつきセイバー（仮）（FATE）

を

短編にて

ペルソナ3 / もう1人のワイルドタイプ

魔法少女リリカルなのは〜息抜きという名の予告風短編〜

を投稿しました!!

病みつきvividは短編にするか活動報告で書いておわりにするか悩んでいます。

皆さんの意見が聞きたいです!!

どれも感想くれたら嬉しいです!!

病みつき六課も感想&リクエスト募集中!!

次回は早速リクエストを使わせてもらいます!!

お世話をする1日（早朝）（前書き）

PV80000達成しました!!

沢山の方に見てもらえてうれしいです!!

今回の話をリクエストしてくださった『妄想劇場』さんには感謝です!!

お世話をする1日（早朝）

俺のベッドに彼女は横になっている。

ピンク色の子供っぽいぶかぶかなパジャマを着ており、顔を赤くしながら俺を見ている。

俺はそんな彼女のサイズにあうぐらいの大きさになるまでたたんだ濡れたタオルを額に置く。

「気持ち良いです」

彼女——リインフォース？は言う。

俺がリインさんを看病してるのには理由がある。

——理由がある

何時も道理シグナムさんとのランニングのために早く起き、ジャージに着替えて部屋を出ると俺の部屋の前で倒れていたリインさんと目が合った。

……えっ？

俺が驚きの余り声すら出さずにリインさんを見ていると彼女は言

う。

「助けてください」

今にも消えそうなぐらい小さな声を聞くと、とりあえず彼女を抱えて俺の部屋に迎えると、ベッドの上に寝かせた。

それが今日の始まりだ。

（というわけで、今日のランニングには参加できません）

俺が念話でシグナムさんに伝える。

（そんなのシャマルにでも任せればいいだろ

（貴様は私と共に居るべきだ

（それに、何故我が主ではなく貴様の所に出向いたのだ）

シグナムさんは念話越しでもわかるくらい怒っている。

（この埋め合わせは何時かするんで、今日は休みにしてくれませんか？）

シャマルさんに見せるのははじめは考えてたがリインさんは俺に看病してほしいと言ってるため付き合うしかない。

（むう……埋め合わせか）

シグナムさんが少し黙ると直ぐに言う。

（明後日の夜は空けておけ）

それだけ言うとシグナムさんとの念話が切れる。

「どうだったですか？」

リインさんが俺に言う。

「今日は休みにしてもらいました」

「よかったですっ！」

笑顔でリインさんは言う続ける。

「君の今日の仕事は全てキャンセルしてリインの看病をしてください！」

「はやてちゃんには私が言っときますね」

「君は1日中私の傍にいてくださいよ！……」

リインさんに俺は言い返す。

「流石に全部キャンセルは……」

「何ですか？」

リインさんは言う

——俺の目を見ながら
——はつきりと

「リイン以上に大切なことあるんですか？」

「君はリインのことを最優先してくれないんですか？」

「リインは君のことが最優先ですよ」

「はやてちゃんも大事ですけど——」

「それ以上に君が大事です！」

「リインは君のことが好きですから」

「君はリインのこと嫌いなんですが？」

「リインはこんなにも好きなのに——」

「嫌いなんですが？」

リインさんが口を閉じると俺の目をじっと見る。

「えーと、1日中は無理だと思いますけど、昼までなら傍にいます
「それでは駄目でしょうか？」

俺がリインさんに妥協してもらおうよう頼んでみる。

「……………今日1日はここにいてもいいですか？」

リインさんは風邪で赤かった顔を更に赤くしながら言う。

「大丈夫ですよ」

俺が言つとリインさんは笑みを浮かべる。

「えへへ、それならリイン我慢します!」

嬉しそうに笑いながらリインさんは言う。

「早速はやてちゃんに報告しますね!」

……俺も報告しとくか。

俺は彼女に念話を送る。

(少しいいですか? フェイトさん)

俺の今日の朝は彼女——フェイトさんの仕事の手伝いだ。

(どうかした?)

送って直ぐに返事が帰ってくる。

(朝の仕事なんですけど……)

(今日は私の手伝いだよ)

(実は——)

俺はフェイトさんにリインさんのことを伝える。

(———ですので、朝の仕事を休ませて欲しいんですけど……)

（駄目だよ）

短くフェイトさんが返事をする、続ける。

（リインも大事だとは思っよ

（立派な六課の仲間だもん

（でも、何であなたがリインの看病をするの？

（普通はシャルがするんじゃないかな

（あなたはリインをシャルに預けて私の仕事を手伝うべきだよ

（――傍にいて）

フェイトさんからの念話が止まる。

俺の返事待ちなんだろう。

（リインさんは俺に見てもらいたいって言ってますし、病人の我が儘ぐらいは聞いてあげたいじゃないですか）

この場合リインさんを人扱いするかどうかは割合だ。

（――病人の我が儘ぐらい

（そうだよ、あなたが優しいのは今に始まったことじゃないもんね

（そんな優しいあなたが私は好きだよ

（何かあったら連絡してね、あなたの我が儘だったら私は何でも聞くから）

それだけ言われるとフェイトさんとの念話が切れた。

「はやてちゃんも今日はゆっくり休んでいって言ってくれましてよ」

「それは良かったですね」

俺が彼女——リインさんを看病する1日が始まった。

お世話をする1日（早朝）（後書き）

こんにちはー勦bでーす

病みつき六課は大体こんなふうに1日の早朝から始まり朝↓昼↓夜と進んでいく形式にしました。

今回はプロローグに出なかったリインフォース？の登場です。

本当はプロローグではやてと共に登場させる予定でしたがキャラの口調がわからなかったため出番カットしました。

そんなリインフォース？の話のリクエストしてくださった『妄想劇場』さんには感謝です！！

とりあえず当分の間はプロローグに出てなかったキャラ（後はギンガさんとナンバーズ位ですが）を出す予定です。

それでは、次回の後書きと会いましょう！！

PS リクエスト募集中です！！

六課では使えないと思ったりしたら短編の方で使わせてもらいます！！

お世話をする1日（朝）（前書き）

後書きにゲスト登場！！

今回から書き方を修正しました

『——』を基本的に地の文では『——』セリフでは『——』と数を偶数に変えました。

お世話をする1日（朝）

リンさんの看病を初めて何時間かたったところで、俺は今日、何も口にしていないことに気付いた。

「リンさん、朝食は食べましたか？」

「食欲ないですう」

力なく言うリンさん。

「何か食べないと駄目ですよ」

「お粥でも作ってくるんで、待っててくださいね」
そう言っただけで俺は部屋から出て食堂に向かった。

この時間なら食堂には人はいない。

俺はそう思っていたんだが――

そんな俺の予想を覆すように彼女が食堂にいて――

彼女は何かを作っていて――

「おはよう」

彼女——はやてさんは俺の気配に気付いたのか、こちらを向き首を傾げながら言う。

「おはようございます、はやてさん

「朝食を作ってるんですか？」

六課の食堂は時間限定でフリーになっており、今はその時間でもある。

……まあ、利用する人は殆どいないんだけど

「私は食べたんやけど、リインが食べてないかと思ってな

「せっかくだし、お粥でも作るうかと思ったんや

「君はどうしたん？」

はやてさんはリインさんのことを心配してるらしい。

……家族を心配しない人なんかいないか

「俺も同じです

「リインさんの朝食を作るついでに自分の分も作るうかと思ってたぐらいですね」

「だったら、君の分も私が作るうか」

はやてさんが笑みを浮かべながら俺に言う。

「そんな、悪いですよ」

「1人分作るのも2人分作るのも変わらんよ

「それにな、君のために私が作りたいと思ってるんや

「——君のためだけに」

はやてさんが俺を見つめる。

——濁った瞳で

——俺を見据える

……断るわけにもいかないか

「お願いします」

俺が言うとはやてさんは嬉しそうに笑いながら俺の分を追加で作りはじめた。

はやてさんが料理を作り終わり、ラインさんの様子を見たいと言ったため一緒に俺の部屋へと向かった。

「ごめんな、ラインも私も君に我が儘ばかり言って」

「大丈夫ですよ

「それに、朝の仕事を休ませてほしいって我が儘を聞いてくれた

じゃないですか」

「ふーん、そうなんだ」

俺の言葉に返事をしたのははやてさんではなく――

「あなたが私以外の人に我が儘言うなんて――

「シヨックだなー」

俺が振り返ると、彼女――フェイトさんは言った。

「フェイトちゃん、仕事はどうしたの？」

はやてさんが一歩前に出てフェイトさんに言う。

「少し休憩してるの」

「休憩がてら、彼の様子でも見ようと思ってね

「そしたら、食堂で2人が話してるのを見つけてね、そのまま跡を追ってたの」

フェイトさんがゆっくりと近づいてくる。

「あかんで、フェイトちゃん

「そんなストーカーみたいなこと――

「彼だっけ嫌がるんちゃうかなあ？」

「彼が嫌がるはずない!!」

フェイトさんは叩きつけるように叫ぶ。

「はやてに彼の何がわかるの!!」

「彼からすれば私と居られる時間を潰されたんだから、そっちのほうで嫌がつてるよ!!」

「フェイトちゃんこそ彼の何を知ってるん？」

「彼は病人のラインの看病をしたいがためにフェイトちゃんとの仕事を休んだんやで？」

「フェイトちゃんよりもラインのことが彼は大事にしてるんだよ」

はやてさんの言葉を聞くと、フェイトさんははやてさんを一瞬睨むと背を向け、そのまま歩きだした。

「ほら、早く行かないとお粥が冷めちゃうし行こか」

はやてさんは何事も無かったかのように俺の部屋に向かって歩きだした。

……フェイトさんには後で何か言っておこう

そんなことを考えながら俺も自分の部屋に向かって歩きだすため後ろを向く。

すると、はやてさんの顔が真前にあった。

驚きの余り何も出来ずに見ていたら、はやてさんが口を開く。

「今、フェイトちゃんのこと考えてたやろ」

「私と二人でいるのに何で他人のこと考えてるん？」

「私と2人できるときぐらいは私のことだけ考えてよ」

「何時も大目にみてるんだから——」

それだけ言うとはやてさんは背を向け、今度こそ俺の部屋に向かって歩きだした。

俺はそんなはやてさんについていくように歩きだす。

……何で考えてたことわかったんだろ

「美味しかったです」

俺の部屋につきリインさんと共にはやてさんが作ってくれた朝食を食べ終えた。

途中リインさんが『口移ししてくれなきゃ食べません!』等言っていたが、はやてさんが何とかしてくれたためその話は割合しよう。

リインさんはベッドの上で横になっていて、俺とはやてさんはソファーに座っている。

「ごちそうさま、美味しかったです」

「ふふっ、お粗末さま」

はやてさんは嬉しそうに笑いながら俺とリインさんを見る。

「どうかしたんですか、はやてちゃん」
リンさんがはやてさんに言う。

「いやな、こうやってるとまるで家族みたいやなーって思ってたな」

「家族ですか？」

俺が首を傾げながら言う。

「せや、君がお父さんで私がお母さんそしてリンが子供や」

俺が父親……

それも、はやてさんみたいな美人と

「いつそのこと、本当に結婚する？」

はやてさんは楽しそうな笑みを浮かべながら俺に言う。

「そ、そんな！？ 俺みたいな奴がはやてさんみたいな美人の方
と結婚なんて……」

自分でもわかるぐらい顔を赤くしながら言うとはやてさんは立ち
上がる。

「冗談や」

それだけ言うと俺の部屋から出ていく。

扉が閉まる前にはやてさんはこちらを向くと言う。

「私は告白するよりもされたいしな」

それだけ言っていると扉が閉まる。

……え？

「はやてちゃん大胆ですね」

リンさんが黙っていた俺の代わりに言う。

「リンも告白するよりもされたいです」

楽しそうに笑いながらリンさんは言う。

——はやてさんの問題（？）発言を最後に

——俺の朝は終わった

お世話をする1日(朝)(後書き)

こんにちはー勦bでーす

隊長補佐「こんにちは、名前が無くて作者から書きにくいと言われている隊長補佐です」

書きにくいんだよ

隊長補佐「名前を考えればいいだろ」

何時かな

今回はゲストが来てます!!

隊長補佐「元神魔王シリーズを書いている『パワード・マウンテン』さんのオリキャラ、ミヤさんです!!」

ミヤ「こんにちは、ミヤです!!」

隊長補佐「よろしく、ミヤさん」

ミヤ「よろしく!!」

いきなりテンション高いね、何か良いことでもあったのかい？

ミヤ「良いこと?」

隊長補佐「こいつの言ってることは無視していいですよ」

ひどっ!？

ミヤ「良いことっていうか、プレゼントを持ってきたんだ!」

隊長補佐「お、パワードさんから？」

ミヤ「いや、黠bから」

隊長補佐「もしもし、フェイトさん?ゴミを消してほしいんだけど――」

ちょ! おま!!

やりかねないから!!--ここだったらやりかねないから!!--

ミヤ「……俺もこいつのせいで“ヤ”られてるんだよな」

“月刊恋愛の友”に出させていただいたんだよね。

隊長補佐「『リック・ブラッディ』としてだな。こいつの恋愛

小説が世に広まったら……男逃げて!!超逃げて!!!!」

ミヤ「……大変なんだな」

大変ですとも

そろそろプレゼントあげようか。

ミヤ「オッケー」

ガサツ ↑プレゼントをあける音

ドンツ！ ↑中から重いものが落ちる音

サツ ↑隊長補佐が落ちたものを確認する音

ガツ！ ↑逃げようとする隊長補佐をミヤさんが捕まえる音

何で逃げるんだよ。

隊長補佐「それ見たら誰でも逃げるわあああああ！！！！！」

ミヤ「すごく……大きいです」

おい、止める！！

今回のプレゼント（？）は最近病みつき六課の感想で話題？になっている『五寸釘』です。

隊長補佐「な、何する気だ！！！」

さつきお前はフェイトさんと呼んだろ。

隊長補佐「腹いせか！！？」

ミヤ「あ、来たぜ」

隊長補佐「止めてくれ！！お願いだからフェイトさんに渡さないで！！！」

後に書く活動報告に期待？

P S 2 『この作品のこのキャラを後書きに出させてやってもいいよ』と言ってくださる方大募集！！！！

原作キャラ以外なら大歓迎です！！

それと、プレゼント等くれたら嬉しいです。

後書きに書かせてもらいます。

ミヤ「プレゼントは頼むものじゃないだろ」

お世話をする1日（夜）（前書き）

PV128000突破!!

たくさんの方に見てもらえて嬉しいです！

お世話をする1日（夜）

はやてさんが作ってくれたお粥を食べた後、リインさんは眠ってしまった。

一緒に寝ようと誘われたが丁寧に断っておいた。

そんなリインさんを部屋に残して、俺は昼から仕事を再開。今日はなのはさんが俺を部屋に誘わなかったため帰宅した。

「お帰りなさいです」

部屋に入るとリインさんは力なく俺に言う。

「ただいま、リインさん」

俺はソファーに腰掛けるとリインさんに尋ねる。

「体調はどうですか？」

すると、リインさんは嬉しそうな笑みを浮かべながら言う。

「君のおかげで大分良くなりましたよう

「本当にありがとうございます」

「別にこれぐらいなら構いませんよ」

……明後日の夜に用事が入ってしまったが

まあ、リインさんが元気になってくれる代償と考えれば安いものだ。

俺が明後日の夜何があるか心配しているとリインさんは口を開く。

「リイン、お風呂に入りたいですう」

風邪を引いてる人をお風呂に入らせるのは……

いや、別にいいんだっけ？

俺がそんなことを考えているとリインさんは自慢げに言う。

「風邪を引いててもお風呂に入っていいって昔シャマルが言っていましたあ」

まあ、シャマルさんが言うなれば別にいいんだろうな。

「ですから、一緒に入りたいですう！」

顔を赤くしながら元気良く言いだすリインさん。

……えっ？

俺が言ってることを理解しようとする前にリインさんは続ける。

「リインも恥ずかしいですけど、1人じゃ入れないですしい……」

……まあ、そうだな

でも、どうしようか……

この時間にはまだ人がいるため女であるリインさんとお風呂に入るわけには……

「リインの我が儘聞いてくれませんか？」

リインさんは悲しそうな顔をする。

我が儘……

そうだ！　こういう時は！！

俺は早速彼女に念話を送る。

（フェイトさん、今時間ありますか？）

念話を送ってすぐにフェイトさんから返事がくる。

（どうかしたの？）

（あなたから頼みごとなんて珍しいね

（何でも言ってよ

（他の人達と違って私はあなたの言うことを何でも聞くよ）

フェイトさんは嬉しそうに言う。

（だったら——）

まずは、部屋に来てもらおうとしよう。

「リインのお風呂に付き合う?」

部屋に来てもらったフェイトさんには早速事情を説明した。

フェイトさんは首を傾げながらリインさんに言う。

「何でリインは彼と一緒にお風呂に入りたいなんて言ったの

「お風呂に入りたいならはやてとかに頼めば良いんじゃないかな
?」

フェイトさんがリインさんを軽く睨みながら言う。

言われているリインさんは俯いたまま何も言わない。

一応だが、リインさんはフェイトさんとお風呂に入ることには納得
してもらっている。

「それじゃ、フェイトさん後は……」

「うん、私に任せて」

そう言つとフェイトさんは顔を近付けてくる。

「今回は私に頼ってくれたし大目に見て上げるよ

「でも、次私以外の人の我が儘聞いたら駄目だよ

「今のリインは病人だからまだいいけど

「それ以外の人は――」

フェイトさんは顔を離すとリインさんを大事そうに胸に抱える。

「それじゃ、行こっか」

「わかりました」

リインさんとフェイトさんは部屋から出ていく。

……さてと

俺は今日、最後になるであろう1人の時間を大切にすることにした。

時間を見計らって俺は風呂場へと向かった。

少し行くと何か話しているフェイトさんとリインさんを見かける。

「フェイトさん」

俺が2人に近付きながら声を掛ける。

すると、気づいたのか、フェイトさんはリインさんを抱えながら俺に近づいてくる。

「リインさんは俺が預かりますよ」

そう言ってフェイトさんからリインさんを受け取る。

「わざわざありがとうございました」

俺がフェイトさんに頭を下げる。

すると、そんな俺の頭をフェイトさんが撫でだした。

「お礼なんか言わなくても良いよ」

「私とあなたの仲だもん、今さらこんなことでお礼なんて――」

「でも、お返しがしたいっていうんなら今日一緒に入れなかった分今度一緒にいたいな」

「――2人つきりでね」

フェイトさんがそう怪しげな笑みを浮かべながら言うと、俺の頭から手を離して、歩きだす。

「私はもう帰るね」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

軽く手を振るフェイトさんに返事をして俺も部屋に戻るために歩きだす。

「もう少し強くし抱き寄せてください」

すると、さっきまで黙っていたリインさんが急に口を開く。

「病人なんですから馬鹿なこと言わないでください」

俺はリインさんの言うのを軽く流しながら部屋へと向かった。

俺の目の前でリインさんが幸せそうに笑う。

部屋に帰り、早速寝ることにしたのまではよかった。

本当だったら俺はソファで寝るつもりだったのだが、リインさんが一緒に寝たいと騒ぎだしたため寝ることにしたのだ。

「えへへ」

「幸せです」

顔を赤くしながらリインさんは言う。

「君と一緒にいられて今日は幸せだったですよ」

「……このままずっと2人でいたいですけど」

「何で皆リイン達の邪魔をするんですかねえ？」

リンさんは続ける。

「リンは、はやてちゃんと君とリンの3人で幸せになりたいだけ——」

「それだけ——」

リンさんが俺の左手を繋ぐ。

「えへへー」

「暖かくて、心地よいですう」

「このまま寝ちゃいそうです」

……寝ないのか？

そんな心配もあったが、それからすぐにリンさんは寝た。

——幸せそうな寝顔だ

俺はリンさんのそんな横顔を見ながら思う。

——彼女を看病する1日はこれでお終いだな。

そのまま俺は、意識を手放した。

お世話をする1日（夜）（後書き）

こんにちはー勦bでーす

今回もゲストを出させていただく予定でしたが、止めました。

ゲストを出す許可をくださった方本当にごめんなさい！！

次回には出したいと思います！

さて、今回ゲストを出さなかった理由は次回に関するアンケートを取りたいからです。

アンケートにご協力ください！！

1、お世話をする1日（後日談）

ショートストーリー形式で看病する1日に関わったキャラの後日談を書きます

2、次に進む

話としては、シグナムとの話がギンガとの話かのどちらかになります。

感想くれたら嬉しいです！！

！！
PS病みつきティアナと病みつきティアナく裏話く投稿しました

私が彼に病みつきになった理由〜フエイト編〜（前書き）

お世話をする1日が終了したため番外編です！！

私が彼に病みつきになった理由／フェイト編／

私が管理局に入隊してすぐのこと。

その日のことはまるで昨日の事のように思い出せる。

私が彼を一方的に好きになった日。

——あの日のことを

その時の私はまだ子供で、所属していた部隊で休憩中は甘やかされるが多かった。

私は晩ご飯を食べるため食堂にいた。

空いていたためきとうに選んで座ろうとした私に声を掛ける人達がいた。

「フェイトちゃん、ここ座りなよ」

その人が指差した席に私は座る。

テーブルにはつの席があり、指差した人の隣に私は座っており、指差した人の対面にも他の人が座っていた。

ついでに、全員女性で大人だ。

「フェイトちゃんは夢とかある？」

「夢ですか？」

首を傾げながら私は聞き返す。

「そう、夢よ」

「フェイトちゃん位の年頃だと色々あるでしょ？」

……夢

その頃の私にはそんなもの無かった。

いや、あつたはあつたけど、どれも夢と言うほど立派なものじゃないのだ。

「あーあ、もしかして、無い？」

俯いて黙っていた私を気遣うように言う。

「皆さんの夢って何ですか？」

何か参考になるかもしれない。

私が言つと2人共苦笑いを浮かべながら言う。

「私は結婚かな」

「私も」

「早く結婚して幸せな生活したい」

……結婚かあ

私には特別好きな異性がない。

——その時はだけど

「あなたは何かないの？」

隣にいた女性が私の逆方向を見て言う。

「……何がですか」

私が声をした人を見る。

間に女性がいたこともあり見にくかったが、なんとか見れた。

——その人が彼だ

その時の私は彼のことを自分より年下の仲間でしか思ってたが、
たが、実際これは凄いことだ。

私位の年でも珍しいのにそれより下がいる。

彼も私のように可愛がられていたが、それは始めだけだった。

当時の彼は今と違って無愛想だったからだ。

「夢よ、あなたも夢とかないの？」

興味津々に聞く女性に彼は指を顎にあて、考える素振りをしながら応える。

「……水族館」

「「はあ？」」

私以外の2人が声をそろえて言った。

私は首を傾げながら彼の夢を聞く。

「家族と水族館に行きたいです」

彼の夢を聞き軽く笑いながら2人は立ち上がる。

そのうち1人が彼の頭を撫でながら言う。

「かなうといいわね」

彼の頭から手を離すと2人はそのまま食堂を出ていった。

「……かなうはずが無い」

ぼつりと呟くように彼は言う。

……家族と仲悪いのかな？

私は席を隣に移動して彼の隣（隣といっても通路ごしだけ）に

座る。

「どうかしましたか？」

私が彼を黙って見ていると無表情で彼は言う。

「ふえ！？」

「ええーと……」

私が慌てて次の言葉を考える。

「ど、動物園は行ったことあるの！？」

……何聞いてるんだろ

彼は無表情で応える。

「1人でなら」

1人？

動物園って皆で行くものじゃないのかな？

「誰かで行ったことないの？」

「……行く人が居なかったんです」

彼は俯きながら言う。

「でも……家族とか」

「母さんは俺が生まれて直ぐに他界して、父さんは俺を施設に預けてどこかに行きました」

……あつ

「ごめんね、嫌なこと聞いて」

「大丈夫です

「もう、何年も前ですから」

彼は平気そうに言う。

普通なら気分を悪くしてもいいのに、何もなかったかのように振る舞う。

「施設を出て直ぐに管理局に入隊して、時間が出来たから行ったんです」

……彼の年齢で管理局にいるのは珍しい。

「誰かといこうにも、部隊の人を誘うわけにも行かないし……」

もし、私かなのは達に出会わずに管理局に入隊したらこうなっていたかもしれない。

「施設の人達を誘うことも出来ませんしね

「だから、1人で行ったんです

「動物園には人が沢山いて驚きましたよ

「……皆、楽しそうでした」

彼は珍しく無表情ではなく口元に笑みを浮かべながら言う。

「……なんで、水族館は家族と行きたいの？」

私は彼の気持ちを考えずに聞く。

「……動物園では親子であろう人達が多かったからですね
「だから、俺も家族と行けば楽しいのになって思ったんです」

彼の言い方からして詰まらなかったんだろう。

……私はどうだろう。

もし、私がなのは達に出会わずに管理局に入隊したら——
私はどうなってたんだろう。

——彼と同じだったのかもしれない

——誰にも愛されず、無愛想に振る舞い

——無表情で目の前の仕事をやるだけ

——楽しいだろうか？

そんなはずない。

楽しいはずが無い！！

「ねえ——」

私が言つと彼は私を見つめる。

——何も見てなさそうな瞳で

——目と目が合ってるのに、まるで見られている気がしない

——昔の私に似ている眼

「今度、私と水族館に行こ」

彼は私の言葉を聞いて驚きながら言つ。

「俺は家族と行きたいだけですから——」

「だつたら」

彼が言い終わる前に被せて言つ。

「だつたら、私があなたの未来のお嫁さんになってあげる」

自分でも驚くほど冷静に言つた。

彼は一瞬驚くと直ぐに笑みを浮かべながら立ち上がる。

「大人になって、ハラウンさんが良ければ」

私は彼の手を取る。

——今の私は驚くほど冷静だ

「——フェイト」

——冷静なんだ

「フェイトって呼んで——」

——だから

「私は未来のお嫁さんなんだから」

——私は本気だ

——

あれから直ぐに彼が部隊から離れた。

もちろん、私は彼が離れることを聞いて悲しかったし、涙を流した。

彼に会えなくなるからじゃなく、『彼を忘れるかもしれない』ことと『彼が私を忘れるかもしれない』ことに——

でも、その心配は気鬱だった。

彼が部隊から離れて、私は彼のことを忘れるどころか更に強く思

うようになったのだ。

—— 離れ離れになってから数年後

私はまた彼と同じ部隊になった。

—— なるようにした。

その時の彼は今程ではないが元気で、社交性があった。
そんな彼を見て私は苛立ちを覚えた。

私以外の人が彼を変えたんだ。

—— 私の彼を

—— 勝手に

まあ、私はどんな彼でも愛してるし、愛すけど。

彼が約束を覚えているかどうかはわからない。

でも、何時か一緒に行くんだ。

—— 2人っきりで水族館に

—— 私達家族で

そのためなら私は何だってする。

どんな犠牲だっ
てかまわない。

——私に夢を与えてくれた彼のためなら

私が彼に病みつきになった理由（フェイト編）（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

隊長補佐「こんにちは、補佐です」

今回はお世話をする1日が終わった記念の番外編です。

「リンさんの看病疲れた……」

ほら、紅茶でも飲んで休んでろ。

「おっ、気が利くな」

今回の『紅茶』は『ケフィア』さんからプレゼントしてもらいました。

「ケフィアさんありがとうございます」

さて、今回の病みつき理由はどうでしたでしょうか？

設定的にはフェイトが一番早く隊長補佐と出会ってます。

「俺の設定がついたな」

家族がいないだろ。

これは今後生かしてくんだが……

「だが？」

こんな設定いらなかったって声があれば書き直す気でいます。

「……俺の設定変わる可能性があるのか」

そういえば、紅茶美味しい？

「……？ 美味しいぞ」

それはよかった。

今回『も』紅茶は彼女に淹れてもらったんだ。

「も……？」

愛情たっぷりだよ。

「……なんか嫌な気がしてきた」

PS 短篇に病みつきシリーズ（仮）纏め〴〵オマケもあるよ〴〵

連載に病みつきなのはシリーズ

を投稿しました。

紅茶ネタが気になる方は病みつきなのはシリーズの更新を期待してください！！

外出する1日（早朝）（前書き）

ヤンデレ要素が無しに等しい今話です。

……何時もヤンデレ要素無い気がする。

外出する1日（早朝）

もはや日課になりつつある早朝のランニング。

待ち合わせ場所に行くと珍しくシグナムさんがいなかった。

……今日は無しかな？

そんなことを考えていたら、後ろから声を掛けられた。

「今日は早いのだな」

声がしたほうを向くと、そこには何時もどおりジャージを着たシグナムさんがいた。

「珍しいですね、シグナムさんが俺より遅いなんて」

何時もは俺よりもずっと早いのに。

前に一度、何時もより30分ほど早く起きたため待ち合わせ場所に来たら既にシグナムさんがいたと時があった。

そんなシグナムさんが遅刻するのは本当に珍しいことだ。

「少し寝付けなくてな」

恥ずかしそうにシグナムさんが言う。

寝つけない？

何かあったのか？

「ほら、喋ってる暇があったら走るぞ」

そう言っただけで走り出したシグナムさんの隣で俺も走る。

「……今日の夜は空けてあるだろうな」

……リンさんの看病から2日後、それが今日だ。

俺は今日、彼女に会うために六課を離れるため、シグナムさんに今日の予定を聞くためにランニングに参加したのだ。

「……今日の夜は何をするんですか？」

恐る恐る俺が聞くとシグナムさんは目を逸らしながら言う。

「デ、ディナーだ」

「ディナー？」

まさか、シグナムさんからディナーの誘いを受けるなんて……夢にも思わなかった。

シグナムさんのことから、『一晩中訓練に付き合え』とか『どちらかが倒れるまで実践練習だ』とか言われるのかと思っていた。

「デートスポットとして有名な処があると話を聞いてな
「是非とも、貴様と行ってみたいと思ったのだ

「……嫌か？」

俯きながら自身なさげに言うシグナムさんに俺は慌てて言う。

「そんなことないですよ！」

「楽しみにしてます！！」

シグナムさんはそれを聞き安心したのか口元につつすらと笑みを浮かべた。

「楽しみにしておくといい

「貴様が私を惚れ直すような夜にしてやろう」

自信満々に言うシグナムさん。

——シグナムさんはやっぱり、こういう表情が似合う。

彼女の横顔を見ながらそんなことを考える。

「楽しみにしてます」

素直に思った一言を言つて、俺はランニングを続けた。

ランニングから帰ってくるとシグナムさんが俺に向かってピンを

投げる。

「それでも飲むといい」

渡されたのは少しだけシグナムさんが飲んだ後の栄養ドリンクだ。

「ありがとうございます」

最近、ランニングが終わったら今ののようにシグナムさんが少し飲んだ栄養ドリンクをくれるようになった。

貰う立場でもあるため強くは言えないが、飲みかけじゃないほうが嬉しい。

……まあ、これはこれでいいけど。

そんなことを考えながら栄養ドリンクを飲む。

この栄養ドリンクは少し変わった味がする。

自分で買ってきたのとは少し違う味――

……苦いというか鉄の味というか

「これから貴様は出かけるんだっ たな」

栄養ドリンクを飲み終わったと同時にシグナムさんは言う。

「はい」

「夕方には帰ってくるのでディナーには間に合つと思います」

シグナムさんは俺に近づく。

「貴様は今から私以外の女に会いに行くんだよな

「私としてはそんなこと貴様じゃなくてもいいと思つのだが、向こうから指名されたのならしかたがないな」

俺の目の前で止まると、冷たく睨みながらシグナムさんは続ける。

「無いとは思つが言つておこつ

「私以外の女に現つを抜かしたら――

「何であろうと切る」

冷たく言い放つシグナムさんを見る。

……本気なんだろう。

その表情や言葉にうそ偽りが感じられない。

「それだけは心得ておけよ」

シグナムさんは俺に背を向けて歩きだした。

……切られないように気を付けよう。

そう思いながら俺も自室に向かった。

外出する1日（早朝）（後書き）

こんにちはー勦bでーす

隊長補佐「こんにちは」

本編で出てきた『栄養ドリンク』は名前こそ伏せましたが『ハケ岳さん』からのプレゼントです！！

隊長補佐「鉄の味がしたぞ……」

鉄の味といえばあの“調味料”しかないだろ。

シグナムさんには『オルイトロス・クラフトさん』からプレゼントしてもらった『サプリメント（鉄分）』を送っておこう。

少量とはいえ、“調味料”を使っただし。

隊長補佐「調味料って、栄養ドリンクになに入れたんだよ」

病みつき理由シグナム編でわかるよ。

そろそろ書くつもりだし。

隊長補佐「見たいような……見たくないような」

さて、次話では皆大好き（少なくとも私は大好き）彼女の登場！！

隊長補佐「結局調味料って何なんだよ!!」

P S この作品は深刻な鉄分不足です。

鉄分に関わるプレゼントをくれたら隊長補佐に与える“調味料”の出番が増えます。

外出する1日（昼）（前書き）

少し更新が遅くなりました。

ギンガの口調に自信がありません。

違和感があったら教えてください！！

今回は『ゼロすさん』のリクエストを元にしています。

外出する1日（昼）

制服のまま六課を出た俺は彼女との待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所は本局付近にあるカフェだ。

俺がカフェに入ると既に彼女は席に座っていた。

彼女は俺を見かけると手を振る。

「久しぶりだね、補佐くん」

「お久しぶりです、GINGAさん」

彼女—— GINGAさんに挨拶をして俺はGINGAさんの前の席に座る。

「ナンバーズの調子はどうですか？」

俺は早速GINGAさんに本題を訪ねる。

「皆順調ね」

「もう少しで更正プログラムも終了するわ」

……そっか。

「それはよかったです」

そんな会話をしていると2人の間に皿が置かれる。

「……えーと」

大きめの皿の上には大量のサンドイッチが置かれていた。

ギンガさんは何食わぬ顔でサンドイッチに手を伸ばす。

「俺達は今から昼食を食べに行くんですよ？」

ここはあくまでも待ち合わせ場所のはずだ。

「ええ、そうよ」

大量のサンドイッチを次々に食べ始めたギンガさん。

……可笑しいのは俺なのか？

「ふふふ……」

「久々に君に会えて嬉しいわ」

「わたし以外の人に気をとられてないか心配で心配で――」

「でも、今日は一緒だもんね」

「……今日だけは」

ギンガさんはニコニコとした笑顔でサンドイッチを食べながら俺を見つめる。

……相変わらずだな。

軽くため息を吐きながらそんな彼女の様子を見ることにした。

ギンガさんに会ったのはナンバーズの様子を聞く以外にも目的があった。

その目的は前々からの約束を果たすためだ。

『近くに美味しいランチがある店ができたから今度一緒に行こうよ』

とのことだ。

ギンガさんとの約束はなるべく断りたくないため俺は二つ返事で承し、今日ナンバーズの様子を聞くついでに行くことにしたのだ。

「ここだよ」

ギンガさんに着いていくとそこには真新しそうな店があった。

「君がわたしとの約束を覚えていてくれたなんて嬉しいわ」

店内に入り案内された席に座るとギンガさんが口を開いた。

「ギンガさんとの約束は忘れませんよ」

俺が言つとギンガさんは嬉しそうな笑みを浮かべる。

「わたしも君との約束は忘れないよ

「君は特別だからね

「君が関わったことを私が忘れる分けないわ」

……変わらないな。

以前からギンガさんは俺の前ではこんな調子だ。

「今日はわたしが奢るね」

ギンガさんがそう言つとメニューを手取る。

「俺が奢りますよ

「ギンガさんには何時もお世話になってるんですから」

ギンガさんは六課に入るよりもずっと前――

それこそ、まだ俺が暗い性格だったところからの付き合いだ。

その時の立場上ギンガさんのほうが上ということもあり彼女からはよく奢ってもらったりしていた。

その時の恩返しにもなれば――

「君が私に食事を奢ってくれるだなんて……

「珍しいね」

からかうように言つギンガさん。

「だったら、お言葉に甘えようかな」

嬉しそうな笑みを浮かべながらギンガさんはウェイトレスを呼んだ。

「これとこれとこれと、後は……これをお願いします」

次々に注目しだすギンガさんを見ながら自分の軽はずみな行動を早速後悔した。

……こんど奢ることにするならバイキング形式の店にしよう。

そう決意しながら俺はメニューに視線を移した。

……高いのを頼んだら支払いできないかもな。

大量の皿を重ねながらもなを食べ続けるギンガさんえお見ていると連絡が入った。

「隊長補佐……!!」

通信を開いてすぐに彼女の叫び声が聞こえた。

「いきなりなんだスバル……」

連絡をしてきた彼女――スバルの叫び声に耳を押さえながら俺は言う。

「どうしたのスバル」

ギンガさんも食事を中断してスバルに言う。

「ギン姉と遊びに行くんだったら私にも一声かけてくださいよ!!」

……あそびじゃないんだけどな。

「いいスバル、わたしと補佐君は遊んでるわけじゃないのよ

「補佐君もわたしも仕事の話をしてるの

「スバルが考えてるほど楽しくはないよ」

ギンガさんが困ったように言うとスバルは悲しそうに言う。

「……楽しくなくても私は3人で一緒に居たかったな

「ギン姉も隊長補佐も何時も忙しそうだもん

「……私に構ってくれないし」

……同じ六課にいるといっても俺は隊長や副隊長達といるし、ギンガさんはナンバーズの更正プログラムのせいもあり最近忙しい日々が続いているらしい。

「……ごめん、スバル

「お詫びとは言えないが、また今度一緒3人でどこかに行かないか？」

「3人共休暇を取ってさ」

俺に続くようにギンガさんが言う。

「わたしもスバルと補佐君の3人で何処か行きたいな」

スバルはそれを聞くと満足そうに頷く。

「私も3人でどこかに行きたい!!」

……少しは元気になったみたいだな。

「それじゃ、今から訓練だから切るね!!」

それだけ言っていると通信が切れた。

通信が切れるとギンガさんが申し訳なさそうに言う。

「ごめんね、補佐君」

「別にいいですよ」

「たまにはスバルと出かけたいですしね」

ギンガさんが悪いんじゃないんだ。

「それでも、3人で出かけたと言ってってくれて嬉しかったよ

「補佐君がわたし達姉妹のことを考えてくれて嬉しいな」

「ねえ、補佐君あの話なんだけど……」

「やっぱり、考え直してくれないかな」

スバルさんは黙ると俺の返事を待つ。

「考え直すって六課を抜けてナンバーズの更正プログラムの手伝いをしないかって話ですよ」

……俺は六課を抜けない。
抜けるわけにはいかない。

「すいません、こればかりはギンガさんの頼みでも……」

俺が申し訳なさそうに言うとギンガさんが慌てて応える。

「別にいいんだよ！

「補佐君が六課にいたいならわたしは無理に抜けさせようなんて
考えない」

「補佐君が好きなようにするといい

「わたしは補佐君の言うこと全部叶えてあげたいから

「補佐君はわたしのことを気にせず何でも言ってね

「それが補佐君の叶えたいことなら何でもね

「わたしは補佐君のためなら何だってするから」

ギンガさんは淀んだ瞳で俺を見つめる。

——何時からだろう

ギンガさんが俺にこんなことを言うようになったのは。

——何時からだろう

「今日は楽しかったよ補佐君」

昼食を食べ終えた俺とギンガさんはそのまま別れることにした。

「俺も楽しかったですよ」

ギンガさんに会えたのは久々だったため余計に楽しめた。

「そっか……」

「もしも六課に居たくなったら私を呼んでね

「補佐君の席は何時でも開けてあるから」

それだけ言ううとギンガさんは俺に背を向けて歩きだした。

……さて、帰って仕事をしたらシグナムさんのディナーか。

ゆっくりと歩きながら俺は今日の予定を思い出す。

——もうすぐ今日の1日も終わりかな。

そんなことを考えながら歩いていった。

外出する1日（昼）（後書き）

こんにちはー 勦bです

隊長補佐「最近あだ名が増えてきた隊長補佐です」

ほっしょんにタホにタイホに……

どれもいい名前をありがとうございますー！

隊長補佐「ありがとうございます」

さて、今回のプレゼントは『ヒロアキ141さん』から頂いた『釘と一緒に煮込んだ黒豆6キロ』です。

隊長補佐「……今回も“調味料”でたのか？」

“調味料”は出てないぞ『今回は』。

隊長補佐「意味深なセリフ！？」

お前はちゃんと食べるよ。

次回のためにな。

隊長補佐「……次回更新しないで欲しいな」

断る。

隊長補佐「チクショウ」

PS 今回はヤンデレ要素少なめですが次回は……

外出する1日(夜) (前書き)

少しだけセリフの書き方を変えました。

前回の急なアンケートに应运てくれた皆様本当にありがとうございます！！

とりあえずはこの形に落ち着きました。

今回の話は前回に引き続き『ゼロさん』のリクエストを少し使わせてもらいました。

外出する1日（夜）

夜、俺は自室にて自身の服装を見る。

……まあ、着替える必要はないかな。

そんなことを考えながら現在時刻を確認する。

シグナムさんから連絡で聞いた時間にはまだ余裕があるな。

まあ、待たせるわけにもいかないし先に行って待つことにしよう。

俺は自室を出て待ち合わせ場所に向かった。

待ち合わせ場所は何時ものように六課の前だ。

俺が着くと既にシグナムさんはいた。

「早いんだな」

俺を見るとシグナムさんは感心したように言う。

「シグナムさんこそ早いですね」

待ち合わせまでまだ30分近くあるのに。

「それだけ楽しみにしてたということだ。

貴様だって早く来たのは楽しみだったからであろう？

何にせよ、貴様と共に居られる時間が増えて嬉しいぞ」

シグナムさんは俺に近づいてくる。

「それでは、行くのでしょうか」

そう言ってシグナムさんは歩きだした。

俺は歩きだしたシグナムさんの隣で歩く。

——これから対する不安を抱きながら

シグナムさんが言うデートスポットは六課から余り離れてはいない場所にあった。

「着いたぞ」

シグナムさんが足を止めて目の前にある店を見る。

絵に書いたような高級レストラン——というわけでもないが、見たまんまでいくとしたらそこそこ値が張るかな？　ぐらいだ。

「どうした、行くぞ」

俺を置いて歩きだすシグナムさんに遅れないよう歩きだした。

レストランの中にはカップルであろう人達が沢山いた。

どうやらデートスポットという話は本当らしい。

案内された席に座ってメニューを取ろうとすると俺より先にシグナムさんがメールを手にする。

「この店は少々変わった店だな。

注文は私がしよう」

そう言って目線をメニューに移すシグナムさん。

あれ？

心なしか顔が赤いぞ。

……変わった店か。

可笑しいことにならなければいいけど。

数分後、シグナムさんがメニューから目線を外すと近くにいた店

員を呼んだ。

俺には聞こえないように店員に注文をするシグナムさんの顔を目に見えて赤くなっている。

……本当に何かあるんだ？

「何を頼んだんですか？」

店員が離れるのを確認して俺はシグナムさんに聞く。

「楽しみにしているといい」

何故か目を逸らしながら自信満々に言うシグナムさん。

行動と発言が矛盾するほど焦ってるんだろうか。

シグナムさんを見ても不安しかない。

……本当に何を頼んだんだ？

「時に、補佐よ」

何も言わずに黙っている俺に対してシグナムさんが口を開く。

「今日は何処に行ってきたのだ」

シグナムさんは俺の目を見ながら言う。

「ただの報告なら連絡でいいものをわざわざ貴様を呼んだのだ、

何処に行ったのだろうか？

なに、私も鬼ではない。

貴様が素直に言えば、そこまで痛くはしないでやろう。

だが、貴様が黙秘すると言っのなら――

遠慮なくやるとしよう」

素直に言っても何かされるの！？

……シグナムさんの目は本気だし、何よりもこの人はこんなくだらない冗談は言わない。

「時間も時間だったんで、一緒に昼食を取りにレストランに行きました！！」

シグナムさんがそれを聞くと口元に笑みを浮かべる。

「私は正直者は嫌いではないぞ。

最も貴様が他の女との関わりを黙秘するとは思えんがな。

だが、私を置いて他の女と昼食か……

貴様はいやいやつれていかれたのかもしれないが、自分が嫌だと思ったら断らないとダメだ。

貴様は押しに弱いところがある。

なに、安心しろ。

そんな弱い貴様を私が守ってやる。

——誰が相手でもな」

……初めてシグナムさんと出会った時では考えられないセリフだ。

シグナムさんは初めは俺を嫌っていた。

だが、今は嫌われていない。

……むしろ、好かれすぎたかんがあるな。

——好かれ過ぎてしまったんだろう。

お互いに黙っていると店員に声を掛けられた。

「お飲物でございます」

そう言って大きめなグラスを1つテーブルの真ん中に置いて戻っていく。

「……あの、シグナムさん」

俺は顔を真っ赤にしたまま動かないシグナムさんに話し掛ける。

「何でグラスは1つなのに、ストローは2つなんですか？」

逆だった場合は店員側のミスなんだろうが、この場合は意図的なんだろう。

「決まっているだろう。」

「ここはそういう店なのだ」

俺はそれを聞いて周りを見渡す。

よくみたら、カップルであろう人達は皆同じモノを2人で仲良く分け合いながら食べている。

——もしかして

「この店はな、カップル専用なんだ。」

1つのものを頼み、それを2人で食べるのがこの店のルールだ」

思い出した！！

少し変わった店が六課の近くで出来たってスバルが言ってた。

変わった店ってこのことだったのか！？

「私達のような……カ、カップルにふさわしい店だと思わないか」

更に顔を赤くしながらシグナムさんはストローを手にする。

「補佐も飲んだらどうだ」

そういつて飲み物を飲みはじめシグナムさん。

その目は俺を睨んでいる。

『飲まなかったら後で覚えておくんだな』

念話を使わなくてもシグナムさんが言いたいことの予想が付いた俺はストローを手にして飲み物を飲みはじめた。

シグナムさんは恥ずかしいのか顔を真っ赤にしだす。

冷静に思考しているが、俺の顔も真っ赤なんだろう。

お互いに黙って飲み物を飲む。

2人の距離は鼻先が触れ合いそうになるくらい近い。

……恥ずかしい。

でも、何処か違和感がある。

言葉には上手く出来ないが、違和感が――

少ししてシグナムさんが離れたため俺も離れる。

「あの、シグナムさん」

顔を赤くしながら俺を見つめるシグナムさんに言う。

「楽しくないですか？」

シグナムさんの表情が目に見えて固まる。

……そう、詰まらなそうなんだ。

いや、そこまで言えば言い過ぎになるんだろう。

——でも

「何故いきなりそんなことを言う。

もしかして詰まらなかつたか？

だとしたらすまない。

私はこうというのが初めてでな、何をしていいかも何処に行った
ほうがいいかもわからないんだ。

……すまない」

俯きながら申し訳なさそうに言うシグナムさん。

——違う

「シグナムさん。

何処か無理してませんか？」

俯いているシグナムさんに言う。

「何時ものシグナムさんは自信満々で、リーダーにむいてそうな
ぐらい行動力があって、何時も周りを安心させてくれる心強い存在
です」

そう、この人の傍にいただけで何故か安心してしまふ。

でも、今日は違う。

「なんか、今日のシグナムさんはらしくないきがして」

挙動不審というか、何処か自信なさげだった。

「そんなので、本当にシグナムさんは楽しいのになって思ったんです」

「フッフ……」

俺が言い終わると同時にシグナムさんは軽く笑いながら立ち上がる。

「そうだな、こんなの私らしくない」

俺は口元に笑みを浮かべるシグナムさんに合わせて立ち上がる。

「あの、お客様如何なされましたでしょうか？」

「出る」

短く言つと歩きだすシグナムさん。

「お金は俺が払いますね」

「は、はあ」

困惑している店員に言いながら、歩いているシグナムさんの横顔を見る。

——自信に溢れた横顔を見る。

シグナムさんと次に着た場所は六課の訓練場だ。

着くと早速シグナムさんはデバイスを展開する。

「……何やるきですか？」

まさか、こんなシチュエーションになるとは思いもしなかった。

「決まっているだろう」

シグナムさんは冷たく言う。とデバイスであるレヴァンティンを振り上げる。

「駄目な男にお仕置きだ」

そう言って振り下ろしたレヴァンティンが俺の左肩を軽く切る。

「——っ!？」

急な出来事に体と思考が追いつかなかった。

棒立ちだった俺は自身の左肩を見てゆつくりと膝を地に着ける。

左肩は軽く切れており、そこから血が流れている。

「ああ、意外と楽しいものだな、駄目な男の飼育も」

シグナムさんは恍惚とした表情で俺を見ながら近づく。

「貴様が私以外見ないようにしないとな」

シグナムさんが俺を指差すとバインドにより俺の動きを止める。

「これが私らしささ」

そういつて今度は腹を横一線に切る。

「昔から刀を手にして戦ってきた」

朦朧とした意識のなかシグナムさんが近づいてくるのを見る。

「男と接するのも常に戦いの中だけだ。

それだけで充分だ。

充分だと思っていた」

シグナムさんが膝を地に着けている俺に顔を合わせる。

「初めてだよ。

戦いの外で私は初めて気になる男ができた。

それが、貴様だ」

シグナムさんは俺の腹に顔を近付けると、先ほど切られた傷跡を見つめる。

「貴様を私のモノにするにはどうしたらいいんだろっな。貴様が私以外を見なくするにはどうしたらいいんだろっな。私にはわからないよ」

シグナムさんは俺の傷口を舐める。

なま暖かい感触だ。

何回か舐めると今度は右手で俺の血に触れる。

「私には戦いしかないからな。思いを告げたり、好きになってもらったりするにはどうしたらいいのかいまいちわからないんだ。

だから、貴様を切る。

貴様が私のモノだと思わせるように――
貴様が私の傍にるように目印をつけておこう。
なに、殺しはしない。

ただ、気絶はするかもしれないがな。

……いや、してもらうか。

そっちの方が抵抗されないから楽だな」

気絶してもらって……一体。

俺は立ち上がるシグナムさんの顔を見る。

未だに恍惚とした顔で此方を見ながら言う。

「おやすみ」

その言葉を最後に俺は意識を手放した。

翌日、目を覚ました俺は自室にいた。

起きて直ぐに鏡で自分の体を見る。

腹に包帯が巻かれていたためそるを外し、傷跡を見る。

そこには、横一線のあとがあった。

……これは気絶する前に切られた場所だな。

俺がそんなことを思っているとテーブルの上に一枚の手紙が置いてあることに気付く。

手紙を手にして内容を見る。

『私は私らしく貴様を手に入れてみせる。
どんな手を使ってもな』

字からしてシグナムさんが置いていったんだろう。

……まあ、切られなかったしいい……のかな？

能天気になんかことを考えながら俺は部屋を出た。

——外出する1日は終わった。

今から毎朝恒例のシグナムさんとのランニングだ。

シグナムさんはどんな表情で俺を出迎えるのだろうか。

昨日の行動にやりすぎたと後悔して気まずそうな顔か

昨日のような恍惚とした顔か

どれにせよ、これだけはわかる。

きっと、シグナムさんらしい表情だということが。

外出する1日(夜)(後書き)

こんにちはー 勦bでーす

「大変な目にあつた隊長補佐です」

まあまあ、落ち着けて。

これあげるからさ。

「飲み物かよ」

『ヒロアキ141さん』からプレゼントしてもらつた『鉄の味がする(ボソ)』『生イチゴ100%ジュース』だ。

「イチゴは好きだ」

ほら、おいしく飲めよ、輸血代わりだ。

「輸血……？」

まあ、いいや」

美味しいか？

「……鉄の味がするけど、美味しいぞ」

……最近、俺はお前が吸血鬼じゃないかと疑うことが多くなつた

よ。

「
なんで!!?」

P S 今回の書き方を讀みづらいと思ったらコメント下さい。

コラボする1日（前書き）

夷「湊、タホに合わせてくれ」

湊「急に何だ」

夷「合わせなかったら——」

湊「わかったからその振り上げた手を収めてくれ」

夷「それと、俺が消えてもタホは俺のことを忘れないようにして
いて」

湊「まあ、別にいいけど、そのかわり幾つか条件を飲めよ」

夷「だが断る」

湊「わがまますぎる!？」

PS今回は『ケフィアさん』が書いている『ネギま 転生しまし
……え?!』とのコラボです。

『湊』は私が書いている『転生者殺し』のオリ主で本編に出番はあ
りません。

ただの宣伝です（おい

コラボする1日

いつも通りの1日だった。

そんなことを思いながら俺は自室に帰って来た。

「……あれ？」

部屋にあるテーブルの上には見たことが無い紅茶のセットが置かれていた。

「何だこれ？」

上には紙が添えてあり俺はそれを見る。

『タホへ これでも飲んで疲労回復しとけよ』

……プレゼントか？

俺は自室にあるポットでお湯を沸かす。

有り難く貰うとしよう。

その日の最後に飲んだ紅茶は少し甘く、飲んだだけだというのに疲れが取れていく感じがした。

——このプレゼントは誰がくれたんだろうか。

今度お礼しないとな。

そう思いながら、ゆっくりと瞼を閉じ今日は寝ることにした。

よお夷だ、タホの奴プレゼントを気に入ってくれたらしいな。

ん？ 何故気に入ったかわかるかって？

そんなの簡単な話だ。

タホが紅茶を飲む前からこいつの部屋の天井でスタンバってたのさ！！

タホが軽く笑みを浮かべながら紅茶を飲むところや、突然のプレゼントで困惑するところ、更には寝るところまで全て見ていたのさ！！

ついでに、全て盗さ——ゲフンゲフン
カメラを使い写真に収めている。

タホといいゴンといい、ヤンデレと関わると毎日が大変みたいだな。

さつさと誰かと付き合つて俺とエヴァみたいに仲睦まじくすればいいものを……

俺は現在時刻を確認する。

『その世界にいられるのは10時間が限界——いや、いないほうがいい』

俺がタホに会うためにある男にお願い（という名の脅し）をしたらいわれた言葉。

タイムアップまで、残り 2 時間を切った。

さてと。

俺は天井から床に降りるとカメラをタホの寝顔に近付ける。

……最後にドアップで撮ってやるか。

写真はまた後日ヤンデレな彼女達にでも送り付けといてやるっ。

俺はシャッターを切る。

と、同時に扉が開いた。

「お兄ちゃん、一緒に寝よー」

「ごめんね、ヴィヴィオがどうしてもって——」

入ってきた奴らと目が合う。

魔^な王^はと^{ヴィヴィオ}その娘^だだ。

やっべー！！

しかも、あの目まさか俺の性別間違えて――

「あれ？

なんで、彼の部屋に女の人がいるのかな？

よくわからないけど、犯罪だよ。

犯罪は駄目なことなんだよ。

駄目なことをした人にはお仕置きしないとね」

間違えてる！！！？

くそ！　こうなったら魔眼で――

『あと、この10時間という間はお前の異能力は全部使えなくしてあるからな』

そうだった！！

魔眼使えねえじゃん！！

でも、身体能力は健在なんだ。

ここから逃げるくらいは――

俺はヤンデレな彼女達からの逃亡劇を始めた。

……騒がしいな。

俺は起きると時計を見る。

寝始めてからまだ1時間ぐらいしかたっていない。

俺は寝間着のまま騒がし場所へと歩いていった。

「何やってるんですか？」

自室近くにある廊下にてなのはさん、フェイトさん、ヴィヴィオが彼女を見ていた。

彼女は正座しながら、俯いている。

本当になんなんだ！？

「あつ、ちょうどよかった。

今からあなたの部屋に行こうとしていたの」

フェイトさんが俺の方を見ながら言う。

「俺の部屋に？」

「うん。」

この人、君の部屋にいたから君の知り合いかどうか聞きに行こうとしてたの」

今度はなのはさんが応える。

俺の部屋にいた？

こんな人見覚えないぞ。

「……タホ」

「ッ！」

俺は彼女を見る。

タホってあの手紙に書いてあったやつか？

……そういえば、タホって何だ？

「俺の知り合いですけど——」

「知り合い？」

俺が言い終わる前にフェイトさんが口を開く。

「ただの知り合いがこんな時間までいるの？
すこし可笑しくないかな？

それに、こんな時間に男女二人つきりでいるのは駄目だと思うな。
どっちにしても、彼女とは少しお話ししないといけないけど」

そういうとフェイトさんは彼女に近づく。

「まっまで！

だから、俺は男だって！！」

男なの！！

どこからどうみても美少女にしか見えないんだけど！？

「嘘はよくないよ。

君みたいな人が男の人なはずがないよ」

なのはさんも彼女……いや、彼に近づく。

このままじゃ危ないかも！！

俺は彼と2人の間に入る。

「待つてください！」

「なんで君が庇うの？

別にそんな人どうなってもいいじゃん。

君には私達六課のメンバーが居るんだよ。

今さらそんな人が消えたって何も変わらないよ」

「なのはの言うとおりだよ。

あなたには私達が居るんだよ。

その人は邪魔でしか無いよ。

それとも、私達よりもその人の方がいいのかな？

だとしたら、嫉妬で狂いそうだよ。

ねえ、早く退いてよ。

あなたがそんな人の傍にいる必要は無いんだから」

……どうする？

ここで退いたら彼の身が危ないし、退かなかったら無理やり退かされそうだし……

「どうするんだ、タホ」

だから、タホって何だよ。

「どうしましょうか」

……強行突破でもやってみるか？

俺がそんなことを考えてると彼が急に手をたたく。

「コレを見るー!!」

そう言って立ち上がるとカメラを見せる。

「「「カメラ?」」」

意味がわからない。

この局面でカメラを出す意味がわからない。

「このカメラのなか、気になるか？」

彼がそう言うとなのはさん達に近づく。

「なっ！ 危ないですよ！！」

「大丈夫だって。俺に任せとけ」

彼は自信満々に言うのと小声でなのはさん達に何か言う。

残念ながらここでは聞き取れない。

少しして彼がカメラをなのはさんに渡す。

「それじゃ、おやすみなさい夷さん」

「余り遅くならないようにね」

「ばいばい、夷さん」

なのはさん達は笑みを浮かべながら3人仲良く帰って行った。

……えっ？

「ミッションコンプリート」

「ちよつと待ってええええええ！！！！！」

なにがあつたの！？

あの短い間になにがあったの！！

「たっく、うるさいな」

彼は俺を置いて歩きだす。

「タホの部屋に行こう。話はそれからだ」

……腑に落ちないこともあるけど――

あれ？

「あの、それなんですか？」

俺は彼を指差す。

彼の体が徐々に灰になっていつてるのだ。

「なっ！　もう時間かよ！！」

彼が此方を向く。

「あ
の！」

彼が何か言う前に俺が口を開く。

「紅茶美味しかったです!!」

タホと書いてたんだし、恐らく彼からのプレゼントなんだろう。

「……そうかよ。面と向かって言われると恥ずかしいな」

彼は頭を掻きながら続けて言う。

「また今度プレゼントしてやるよ」

有難い話だ。

あの紅茶は気に入ったしな。

「そういえば、自己紹介しつなかったな」

体の半分以上灰になってるというのに彼は落ち着いて言う。

「両希 夷だ」

「俺は——」

「タホだろ」

「違いますよ! つーか、タホって何なんですか!?!」

彼——夷さんは笑いながら灰になり、消えていった。

……何だっ たんだよ。

ため息を吐きながら自室に戻る。

——次のプレゼントは何時かな。

軽く笑みを浮かべながら、俺は自室に戻る。

——今度は一緒に飲みたいな。

コラボする1日（後書き）

こんにちはー 勦bでーす

タホ「隊長補佐です」

先ずは一言。

タホ「なんだ？」

ケフィアさんすみませんでした！！！！！！！

タホ「早速土下座！？」

……夷さんの口調全然違うし、性格違うし、話のネタパクったし、宣伝とか言って湊出したし。

タホ「……焼き土下座だな」

そこまで！？

PSケフィアさんマジですいませんでした！！

口調や性格等に違和感があれば書き直します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6912w/>

病みつき六課

2011年11月14日16時45分発行